王さまと靴屋

新美南吉

ある日、王さまはこじきのようなようすをして、ひとりで町へやってゆきました。

町には小さな靴屋がいっけんあって、おじいさんがせっせと靴をつくっておりました。

王さまは靴屋の店にはいって、

「これこれ、じいや、そのほうはなんという名まえか。」

とたずねました。

靴屋のじいさんは、そのかたが王さまであるとは知りませんでしたので、

「ひとにものをきくなら、もっとていねいにいうものだよ。」

と、つっけんどんにいって、とんとんと仕事をしていました。
「これ、名まえはなんと申（もう）すぞ。」
とまた王さまはたずねました。
「ひとにくちをきくには、もっとていねいにいうものだというのに。」
とじいさんはまた、ぶっきらぼうにいって、仕事をしつづけました。
　王さまは、なるほどじぶんがまちがっていた、と思って、こんどはやさしく、
「おまえの名まえを教えておくれ。」

とたのみました。

「わしの名まえは、マギステルだ。」

とじいさんは、やっと名まえを教えました。

そこで王さまは、

「マギステルのじいさん、ないしょのはなしだが、おまえはこの国の王さまはばかやろうだとおもわないか。」

とたずねました。

「おもわないよ。」

とマギステルじいさんはこたえました。

「それでは、こゆびのさきほどばかだとはおもわない

か。」
と王さまはまたたずねました。
「おもわないよ。」
とマギステルじいさんはこたえて、靴(くつ)のかかとをうちつけました。
「もしおまえが、王さまはこゆびのさきほどばかだといったら、わしはこれをやるよ。だれもほかにきいてやしないから、だいじょうぶだよ。」
と王さまは、金の時計をポケットから出して、じいさんのひざにのせました。
「この国の王さまがばかだといえばこれをくれるのか

い。」

とじいさんは、金づちをもった手をわきにたれて、ひざの上の時計をみました。

「うん、小さい声で、ほんのひとくちいえばあげるよ。」

と王さまは手をもみあわせながらいいました。

するとじいさんは、やにわにその時計をひっつかんで床（ゆか）のうえにたたきつけました。

「さっさと出てうせろ。ぐずぐずしてるとぶちころしてしまうぞ。不忠者（ふちゅうもの）めが。この国の王さまほどごりっぱなおかたが、世界中にまたとあるかッ。」

そして、もっていた金づちをふりあげました。

王さまは靴屋（くつや）の店からとびだしました。とびだすとき、ひおいの棒（ぼう）にごつんと頭をぶつけて、大きなこぶをつくりました。

けれど王さまは、こころを花のようにあかるくして、

「わしの人民（じんみん）はよい人民だ。わしの人民はよい人民だ。」

とくりかえしながら、宮殿（きゅうでん）のほうへかえってゆきました。

底本：「ごんぎつね　新美南吉童話作品集1」てのり文庫、大日本図書
　　1988（昭和63）年7月8日第1刷発行
底本の親本：「校定　新美南吉全集」大日本図書
入力：めいこ
校正：鈴木厚司、もりみつじゅんじ
2003年9月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。